

2023年漁期のアユ資源状況について

琵琶湖海区漁業調整委員会
令和5年(2023年)8月21日
滋賀県水産試験場

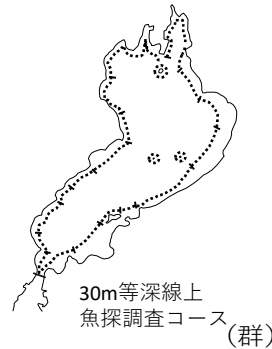
資料4

1. 2023年1月以降の資源評価

(1) 資源水準(量・尾数)の評価

① 周回コースの魚群調査

◆1月には平年比79%の魚群数で、産卵量と同水準の評価だったが、2月以降は減少し、7月まで低水準。



項目	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月
2023年小群換算値	142	45	4	14	109	58	21	
平年値	180	167	146	141	363	401	124	155
平年比(%)	79	27	3	10	30	14	17	

※平年値は過去10年間の最大値と最小値を除いた値の平均

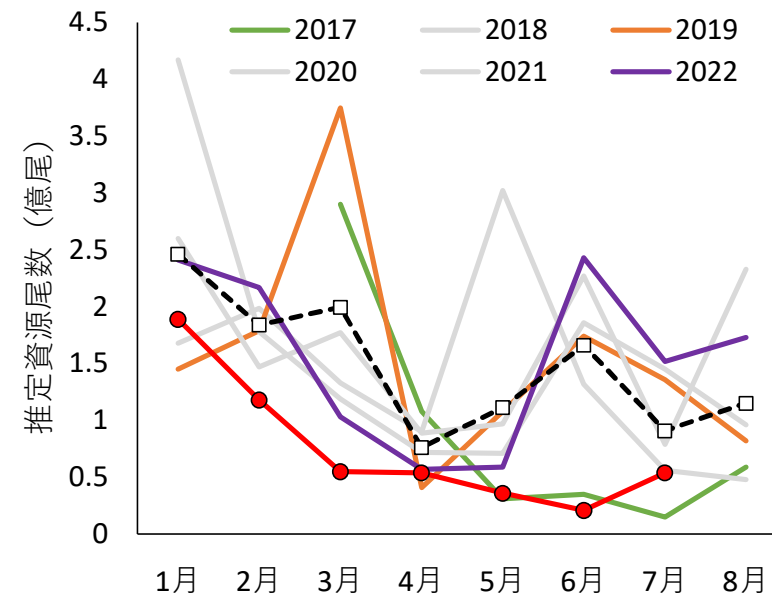
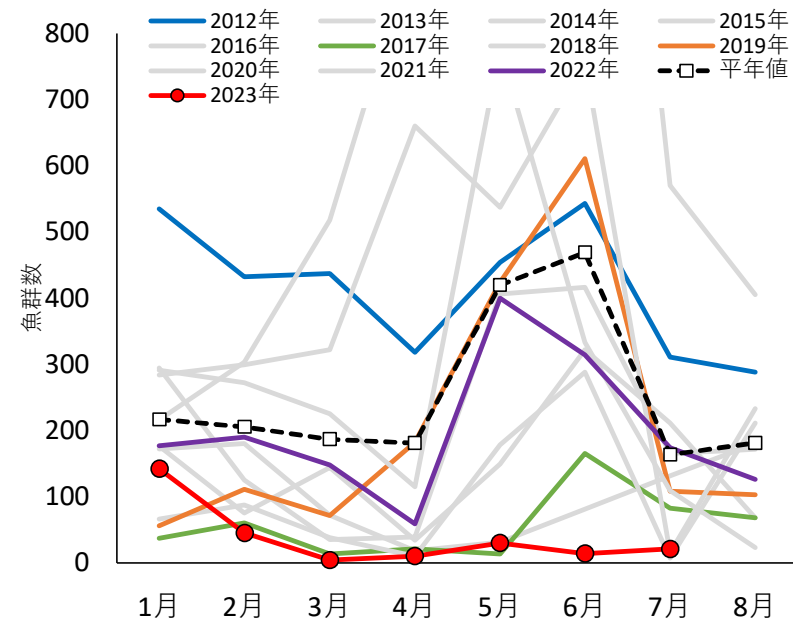
② 北湖全域横断コースの魚群調査

◆全域調査から推定した資源尾数は、周回魚探の結果と同様に平年を下回った状態が続いている。



項目	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月
2023年資源尾数	1.9	1.2	0.6	0.5	0.4	0.2	0.5	
平年値	2.5	1.8	2.0	0.8	1.1	1.7	1.0	1.2
平年比(%)	77	64	28	71	32	13	59	

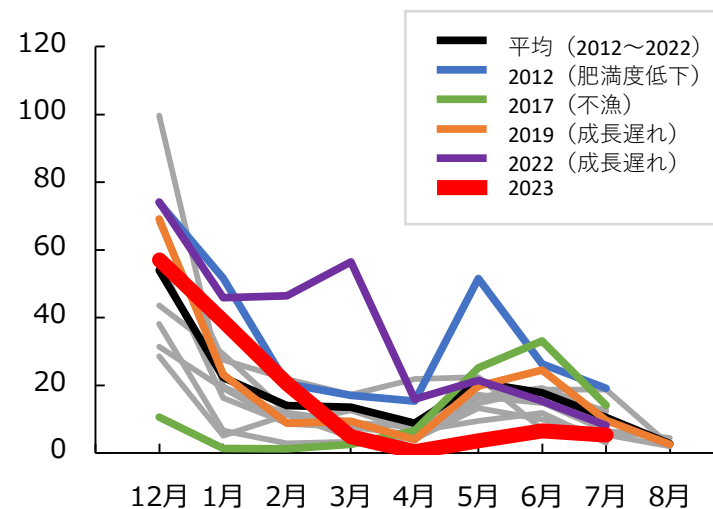
※平年値は調査の始まった2017年～2022年の平均



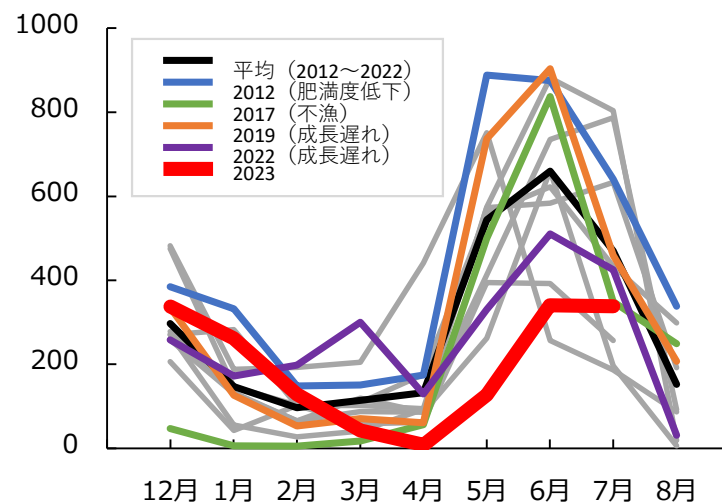
③エリ漁による漁獲尾数の変化（月別）

◆過年度からデータを提供して頂いている2漁協の情報をもとに、エリ1統当たり漁獲尾数の月別変化をみると、漁期開始から2月にかけては平年値を上回ったものの、3月以降は極めて低い水準で推移。エリ1統あたり漁獲重量では5月以降回復傾向がみられたものの、平年よりも低い水準にとどまった。

エリ1統あたり漁獲尾数（万尾/統/月）



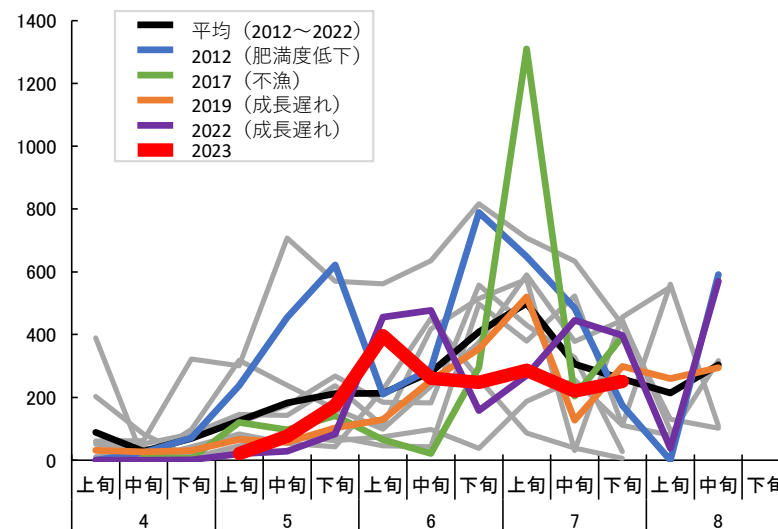
エリ1統あたり漁獲重量（kg/統/月）



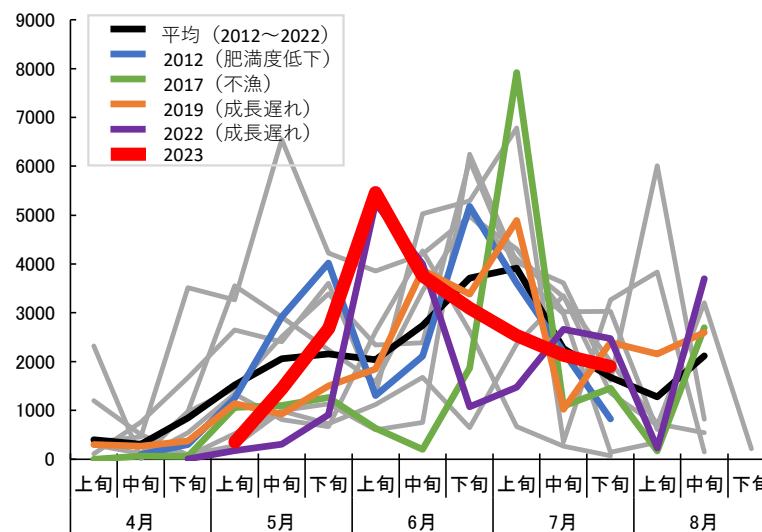
⑤ヤナ漁による漁獲尾数の変化（旬別）

◆過年度から情報を提供して頂いている2漁協の情報をもとに、ヤナ漁の漁獲尾数を旬別にみると、開始当初は低い水準であったものの、時期が進むにつれて増加し、6月上旬には平年値を上回った。その後は平均値と同じかやや下回る程度で推移した。

ヤナ漁獲尾数(万尾/河川/旬)

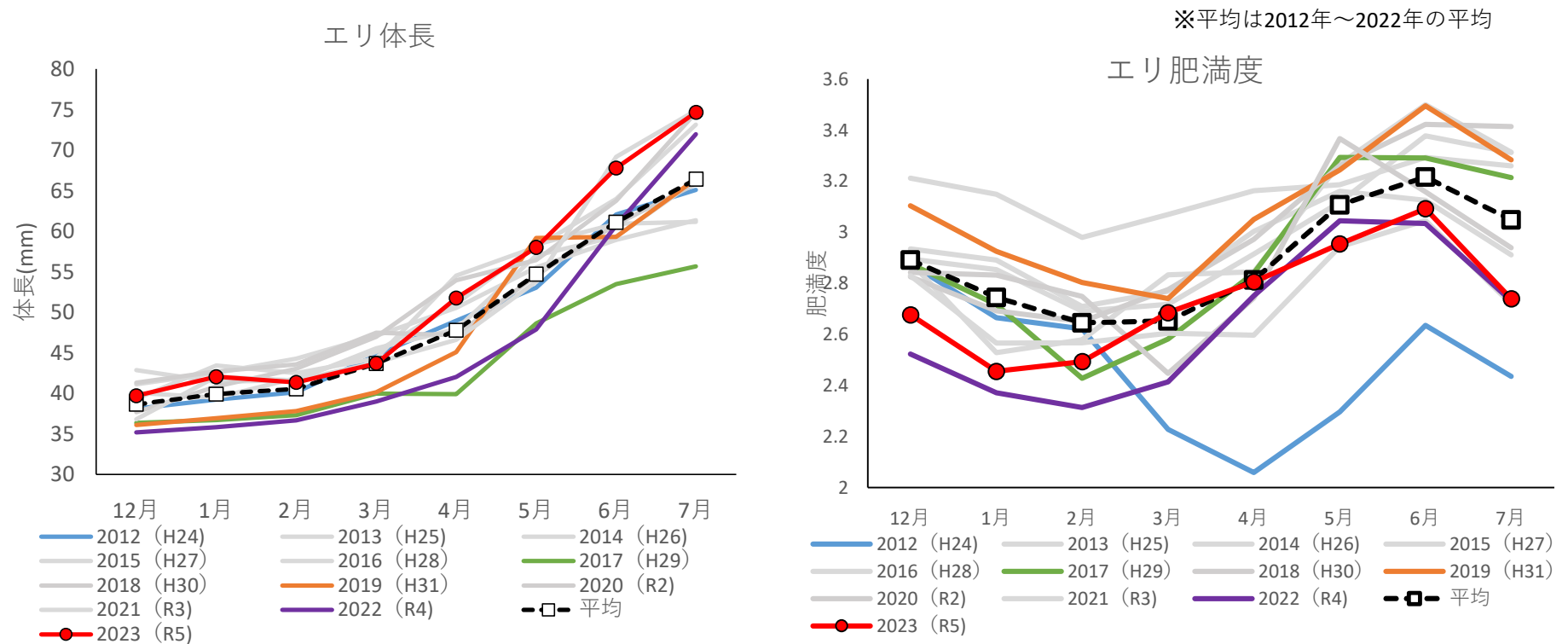


ヤナ漁獲重量(kg/河川/旬)



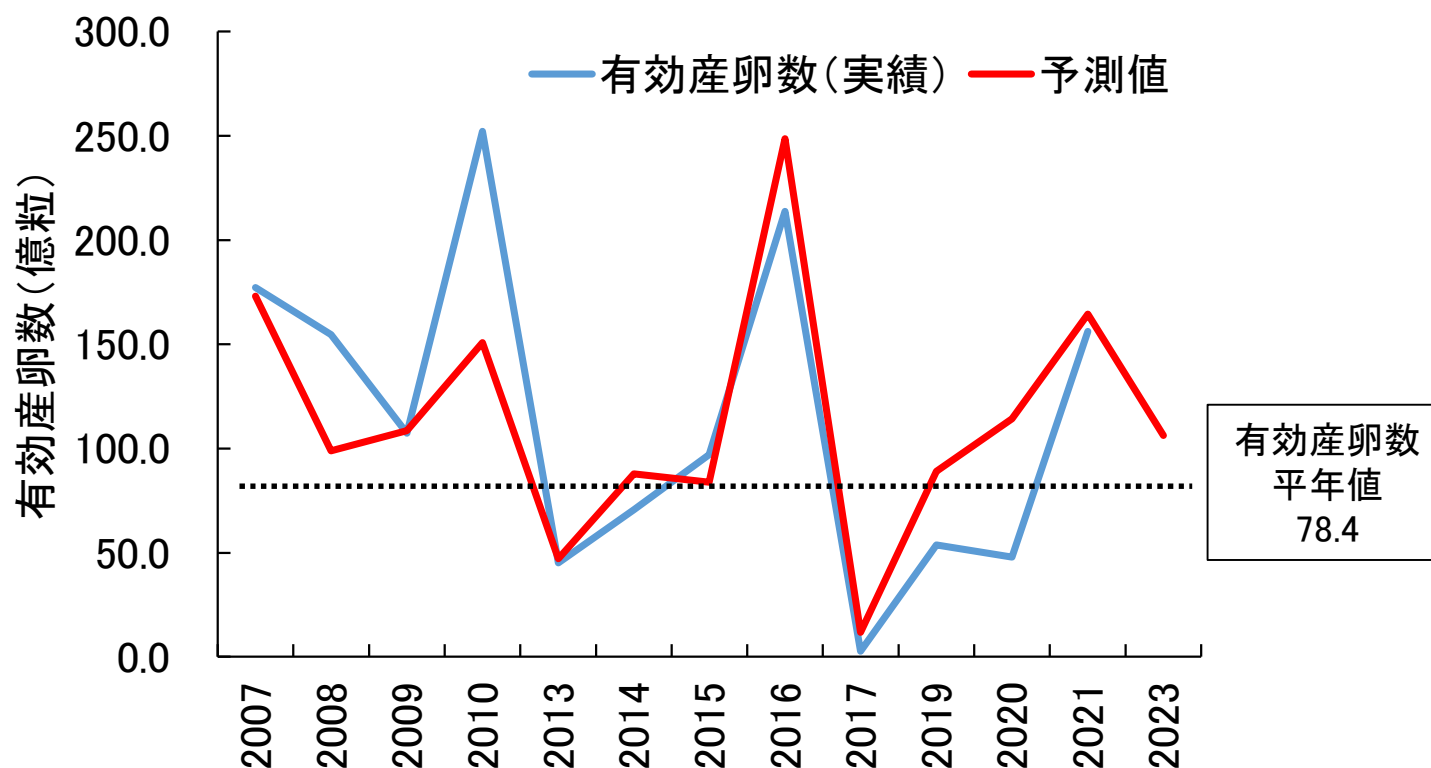
(2) エリ漁獲魚の体長と肥満度

- ◆平均体長は平年を上回る水準で推移。特に4月以降の体長の増加が大きかった。
- ◆肥満度は漁期当初は低い水準で推移。3月以降は極端な肥満度の低下はみられなかったが、7月に入り肥満度が低下した。



④産卵量予測

$$Y \text{ (有効産卵数)} = 0.123X_{\text{May}} \text{ (5月魚群数小群換算値)} + 6.149X_{\text{Jun}} \text{ (6月平均体長)} - 317.95$$



- ◆魚群数は少ないものの平均体長が大きいため、産卵量予測値は106億粒（平年比135%）で直近10年の平年値を上回った。
- ◆姉川の濁水や濁水等、産卵環境が悪化した場合には、実際の産卵量はこれより少なくなる恐れがある。

5. 2023年漁期のアユ資源状況

- ◆魚群数は周回調査、トランセクト調査ともに1月までは平年よりやや少ない程度であったが、2月から3月にかけて激減し、以降は極めて低い水準で推移した。
- ◆3～4月は魚群数が最も少なく、漁期中で最も不漁となった。
- ◆5月以降、エリではアユの成長に伴い漁獲重量の回復傾向がみられたが、漁獲尾数は低水準のままであった。一方、ヤナは比較的好調であり、エリのような不漁はみられなかった。
- ◆今年度はアユが高成長であったこと、6月の降雨量が多かったことにより、アユの河川遡上が平年よりも活発になったことで、6月以降、湖中にとどまるアユの資源量がさらに減少したと考えられる。